この關係の究明が最も重要なる役割をなし、此の關係の究明の第一歩は我々の眼前に横はれる鄉土の風土と生活との關係を實證するにあると日頃より主張せる著者が最近に於ける業蹟を纏めて爰に鄉土地理研究と題し廣く世に贈られた。

本書は鄉土としての村落と都市、鄉土地理への學的根據、鄉土地理研究項目の三編より成つてゐる。先づ鄉土の單位である一軒家の考案から自然地理的制約を受けて形作れる諸々の村落集團、更にはその最も複合せる場合たる町・都市に及ぼし、次に泰西に於ける地域研究が如何なる思潮に基いて行はれ來り且つ現に行はれてゐるかを明にして、更に鄉土教育乃至地理教育の實際を見、最後に著者の行へる鄉土觀察要項に加へてイギリス・合衆國・フランスに行はれてゐる臨地調査項目を紹介してゐる。

鄉土の地理學的認識に筆を起して鄉土學にまでも及んでゐるが、蓋し爰に本書の特色があり、輓近我が國に於て著しく擡頭し來つた鄉土教育に指針として貢獻する所極めて多大であらう。（菊判三二五頁、圖版三十二葉、刀江書院發行、價貳圓貳拾錢）〔村松〕

彙報

◉昭和五年卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける本年史學科卒業論文の題目左の如し。

國史專攻

文藝復興期に於ける日本道への歸着　藤井　駿

中世に於ける熊野の勢力とその中世文化に及ぼせる影響　菱谷　武平

中世後期に於ける營利精神の展開　石垣　亮吉

德川封建社會と浪人特に初期浪人の特質に就て　伊藤　只人

室町時代に於ける蓮如を中心とせる一向宗に就て　樺島寛之助

上古に於ける言語信仰に就いて　加計　敏吉

中世に於ける「幽玄」思想の展開（世阿彌に於ける「幽玄」の歷史的背景）　田村　勝郎

中世の歴史觀　柴田實
西南戰爭の經濟史的考察　今野善胤
本居宣長　村尾誠
鎌倉時代の商業に關する一考察　森川是隣
德川時代後期に於ける國家意識　向居淳郎
中世に於ける歴史思想の考察（特に神皇正統記に就て）　武藤誠
平安朝末期に於ける貴族庶民の文化的交渉　鍋島直康
五山僧侶の精神生活について　中村一良
室町時代中期に於ける新佛教　大熊立治
德川時代に於ける官金及び寺社名目金の貸附に就て　大角良雄
中世後期に於ける庶民生活と宗教運動との關係に就いて　阪本菫夫
近世社會に於ける階級構成の觀念に就て　佐々木茂八
鎌倉時代に於ける武士精神の展開　下川秀樹
江戸時代に於ける階級思想の一考察　德丸福藏
平安朝時代の澆末思想　和田捷雄
密教興隆の社會的背景　山本林
江戸後半期に於ける庶民の資金融通に就て　石塚多

東洋史專攻

漢代社會政策の一考察　神戸收介
兵農分離の社會的背景　森田鐵次
鄭氏治臺經政考　吉川清一

西洋史專攻

中世初期に於ける教權の發達　原三平
歴史上に現れたる Deutsche Romantik　服卷量平
羅馬皇帝崇拜の成立に就いて　井上智勇
Ludwig der Deutsche 他界の後より Otto 大帝に到る獨逸諸君主の皇帝思想及びその一統政策　吉村彌太郎
前半に於けるアメリカ政治思想史に就いて　川本猪三郎
「古き自由なるロシヤ」は Novgorod に於て如何に發展したるか　兒島英之助

佛蘭西ロコヽの社會と繪畫　國友　正
露西亞に於ける勞働者の革命運動に就いて　松岡　瑞雄
フランスの二月革命の特殊性について　村上　五郎
莊園組織の動搖に伴ふ英國農民の自覺—1381年 Peasants' Revolt を目標として—　村上　一郎
第十三世紀 Florence 市民發展の歷史的意義　高橋　金也
宗教改革の先驅者としてのサボナローラ　高井　貞橘
フランシス派に就いての一考察　富尾　理章
英國近世前半期に於ける反國教的新教分離主義の發展　辻村　正吾
フリードリヒの國家崩壞直後に於ける大變革に對する豫備階梯に就いて　矢部　周藏
普佛戰役起因に關する一考察　吉本　香起
地理學專攻
北伊勢の土地とその住民　岩根　保重
東攝平野に於ける聚落の變遷　神坂　至
文化圈の擴大と牧地との關係より見たる甲府盆地　增田　忠雄
東駿河の經濟地理學的考察　古澤　三郎
舊薩藩麓之研究（軍事的聚落としての麓）　太田喜久雄
六甲山塊南北の比較　島　之夫
日本等溫線及等偏差線に就きて　瀧本　貞一
琵琶湖湖北地方の交通地理　內田　勘

●京都帝國大學第二十一回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲め例年の如く來る八月一日より一週間夏期講演會を開催して一般有志の聽講を許すといふ。講演科目中史學地理學に關係あるもの左の如し。（聽講手續時間割等は庶務課に照合すべしと）

近世政治思想史　法學部教授　森口　繁治
佛教の理想的及び實踐的規範　文學部助教授　羽溪　了諦
民族地理　文學部講師　小牧　實繁
平安時代の建築　工學部講師　藤原　義一

科外講演

日本の家族制度と民法　文學部教授　三浦　周行

日本史に見ゆる階級鬪爭の特質　法學部教授　牧　健二

●帝國學士院授與式

帝國學士院は去る五月十五日同院に於て授賞式を行ひたるが、其内、地理學に關する受賞者左の如し。

學士院賞

瀨戸内海の潮流および潮汐に關する研究　小倉　伸吉

●京都帝國大學文學部國史專攻學生關東地方研究施行記（二）

十月十六日（水）　内閣文庫（既揭）、宮内省圖書寮、早稲田大學演劇博物館

圖書寮では本館の左右にコンクリート三階造の立派な書庫が建てられて貴重、普通の兩書庫に分れ、各建物の最上層は曝涼室になつてゐる。一行の展觀に當てられた陳列室は此の貴重書庫の曝涼室であつた。

陳列の圖書は今迄の樣に多くはなかつたけれども、何れも皆精選されたもので、課長芝葛盛氏其他諸氏より說明があつた。中右記、水左記、看聞御記、晴富卿記、雅久卿記の原本、春記（古寫本）及び桂光院宮御書類等があつた。看聞御記では初めに宮中雜事御佛事等委細記錄後見最有憚、雖然後日自然爲不審亘細記之、萬歲以後須投火中との跋語があり、次に一段下げて月次連歌懷紙散在不可然之間、態與繇懷紙書之、且後日爲一覽也、百韻寫次第續之、更不可有混亂とある事は、紙背文書の性質を考へる上に注意すべきであらう。晴富卿記、雅久卿記にも連歌師宗祇に關する有意義な記載が見出される。前者の延德二年十一月七日條に、文庫上聲自今日致沙汰、種玉菴宗祇歎、文書之汚損送千疋、及此沙汰、希代之懇念也、と記し、之に應じて後者にも、其の三日前、四日條に文庫破損上聲無正體者也。仍種玉菴宗祇爲合力料足千疋送進之、家君御祝着至極也、誠以不思寄芳慮也、代々將軍

家雖被仰付之、葉室黄門不及披露、不被聞召入之處、此乞食僧致此沙汰之條、希代之事也云々。と見える。宗祇の官府文庫に對する隱れた功績が明確に跡づけられてゆかしく思はれた。唯宗祇を乞食僧と言はれてゐるのを見て苦笑をゝめかねたのである。春記は寫本とはいへ、鎌倉初期のものと思はれ裏には大日祕要抄全部が寫されてゐる。最後の桂光院宮御書類では、智仁親王の御草名が色々に書かれてゐる事が注意を惹いた。

次に佛經と漢籍類が陳列されてゐたが、其中光明皇后の御願によつて書寫された二跋の楞伽經があつて、初めの天平十二年五月一日のものは普通に見るが、之には更に奥に天平勝寶七歳十月十四日としてその左に從七位上守大學直講上毛野君立麿正、大德元興寺沙門勝叡、大德沙門了行、大德沙門尊應、業了沙門、法隆と名を連ねてあるのが珍しい。四分律音義は從來王朝時代に日本人が朝鮮經を寫したのでないかと言はれてゐるが、文字の用法や、發音法なり、紙などから推して、矢張り朝鮮經と見るのが穩やかであらうとの事であつた。石清水八幡宮舊藏宋版一切經は明治初年の神佛分離の際散逸したものであるが、今は六千三百卷殆んど全部こゝに揃ひ、小數の殘本も其の所在が知れてゐるさうである。之を披いて見ると、行間に日本國僧慶政捨、日本國僧行一捨板十片、日本國比丘明仁換刊などと日本僧の名が喜捨の中にあるのは當時宋に留學してゐた學僧達と見えて何となく感興をそゝられた。

漢籍では先づ金澤文庫本の宋版大平寰宇記がある。之は宋版中でも佳絶なものとされるが、其の綴ぢ方が又少し變つて、粘葉綴じでも中央部のみ糊で附けたに過ぎない。更に元版西遊記、明版橘浦記などの劇本も亦珍本中の珍本と貴重されるもので、共に「德山毛利家藏書」「德藩藏書」の印がある。終つて書庫に案内されたが貴重書庫の中に道藏經十二箱があつた。かく完全に揃つてゐるのはこゝばかりで、版は萬曆の重版との事である。

書庫を一巡して休憩室に歸ると、壁間に宸奎閣碑銘及び育王山四絶句の見事な宋拓二帖が掛けられてゐた。共に聖一國師將來品で、前者の終りに元祐六年正月癸亥、

蘇軾撰並書と明らかに讀まれる。之だけ完全な宋拓は他に多く見られないであらう。茶を啜る間更に類聚符宣抄の寫本七冊を示された。其等は奥書によると保安二年五月より三年八月迄の古いもので元祿本に據つた國史大系所收のものは相當訂正を要するらしい。

圖書寮を辭したのは四時前であつたから、自動車を飛ばして早稻田の演劇博物館を訪ふ事とした、館は今開館一週年記念として歌舞伎劇場圖の特別展覽會が催され、肉筆、版畫、寫眞等の夥しい參考圖が展觀されてゐた。數の少い肉筆劇場圖部特殊寫眞複製部と言ふのは別として九分通りを占める年代順劇場圖展列部を、先づ第一期能舞臺襲用時代、第二期引幕大道具創始時代、第三期屋根架設時代、第四期破風廢止時代、第五期洋風漸入時代と大別した上、更に例へば第一期を慶長期、寛永期、正保期、承應期、明暦萬治期と言ふ風に細分して、夫々多くの圖を掲げてあり、又繪そのものにも見るべきものが多かつた。肉筆劇場圖部は一二の繪卷を除き、すべて屏風繪の大作で、雄大な構圖と重厚な色彩で描かれた慶長期のものを主とし、色々の意味で注意すべきものが少くなかつた。

十七日（木）　金澤稱名寺、鎌倉寶物館及び鎌倉史蹟

午前七時三十五分一行東京驛をたつて横濱に下車、直ちに杉田行の自動車に乘る。杉田で武相乘合自働車に乘換へると、此のあたりから自動車の爲、特に道が整へられ、動搖少くて非常に氣持がよい。稱名寺の門前で車を降りた時、何時の間にか空模樣が險惡になつてゐるのに氣附いた。打見たところ樓門本堂を始めすべて茅葺となつてゐて近畿の寺を見慣れた目には何となく異樣な感じがした。事務所に案内を通じて先づ堂宇見學より始める。樓門を入ると正面には本堂彌勒堂、右に隣つて釋迦堂立ち、釋迦堂の前には鐘樓がある。左手の池には西際迄、山の尾が延び出てゐる。此の景觀を前にして住職より一通りの說明を受け、次で本堂に登る。堂は新しいが其の須彌壇と護摩壇のみは古い。左方に積んだ箱には一切經と記されてゐる。やがて鋭い鍵の音と共に壇上厨子の扉が開かれて、國寶彌勒の立像が拜される。等身大の其の體

軀は堂々たるものではあるが、それだけ稍々鈍重で全體に今一つ洗練味がない樣に拜まれた。然し最近胎内から發見された經文と願文とを陳列室で見ることの出來たのは喜ばしい。釋迦堂の釋迦は三國傳來で有名な洛西嵯峨清涼寺本尊模刻の一であるが、洗練味は更に乏しかつた。しかも興正菩薩作と言ふに至つては鎌倉極樂寺、大和西大寺、唐招提寺の模刻と同一關係にあつて興味が深い。之にも胎内墨書銘が發見されたと聞く。堂前の鐘樓にかゝれる勁健な輪郭の鐘も亦國寶である。

それから住職の案内で西方山の尾に穿たれたトンネルを抜け、文庫谷と稱する稻田を一見して事務所の陳列室に上つた。

彌勒胎内より出た經文とは法華經八卷で、願文の終りに、けんち三年四月十二日平うちの女とある事は像の正確な製作年代を示すものであらう。平うちの女とは實時の女か、それはともかく、本願文が其の内容に於て極樂往生を願つてゐるのは、本像の彌勒佛なる事に思ひ合せて興味ある事と言はねばならない。かく阿彌陀以外の佛菩薩に極樂往生を祈願する例は支那南北朝時代にも認められ、これが說明として佛菩薩に於ける個性認識の缺如が擧げられるのであるが、此の意味に於ては本像の場合も同樣と認める外はない。これ空也、惠信等の唱道により、平安中期頃から愈盛んとなり法然上人の出現によつて彌が上に廣く深く浸潤して行つた阿彌陀信仰が、其の勢の趣くところ、一部國民の佛敎信仰を唯盲目的に彌陀一筋の方向に導き、こゝに再び昔日に類した姿を現すに至つたものであらう。猶ほ此の願文と共に小さな紙包も納められて、筆、竹くひ、草莖、釘が包まれてゐた。經文書寫の具でもあらうか。釋迦胎内銘は寫眞によると德治三季七月二十六日、奉行尊也執筆了融大佛師法印院保と讀まれる。

繪畫には國寶として本寺創立者、北條實時、孫貞顯の肖像があつて、前者が法體のゆるやかなるに對し、後者は立烏帽子に狩衣の比較的嚴めしい姿である。法體の方は色彩が餘程剝落してゐるが、共に確かな筆致によつて能く其の風丰を覗ふ事が出來る。

次に記錄文書に向つて寺の緣起を求めると、横濱市堀

內町寶生寺に藏する印融筆稱名寺勸進帳草案の寫しがあつて其の中に「平時政ヨリ第四代末孫越後守實時初建立阿彌陀院、其子越後守顯時次造立釋迦堂、其子武藏守貞顯後建立彌勒堂、三代相續造營三堂、各勵建立之誠心、（中略）經藏納所說經王之金文、密藏積小野廣澤十三流之聖敎、文庫入文書歌道一千卷、重寶總出生之聖敎、畫軸世間之書籍極名、寺中之構勝餘事」と見えてをり、寺では此の筆者印融を永正十六年八十五歲を以て寂した眞言宗の高僧印融としてゐる。若しこれが事實であるならば、本草案は室町中期のものとなり、從つて相當據りどころとなるのであるが、こゝに彌勒堂が貞顯の手に成つたと言ふ事は、現在の本尊彌勒の胎內から出た願文によつては或種の制限を餘儀なくされる、像の造立が早きに失し且それが貞顯ならぬ一「平氏の女」の本願に成れる事も此の考を暗示する。從つて此の草案の如く貞顯が彌勒堂を建立し且現存彌勒が當初よりその本尊であつたとするならば、貞顯の事業は既に早く一族の本願に成つた彌勒像の爲、別に新たに一構の堂宇を起した事となるであらう。

然し一方又本寺の草創を實時の阿彌陀院建立とせる事は先の彌勒願文の理解に或暗示を與へるものと言へる。何故ならば本寺の草創年次を、彼の鐘の銘文に因て文永己巳卽ち六年前後とする時、願文の書かれた建治三年迄は僅か十年になるかならぬ間であり、從つてそこに此の寺を中心とした阿彌陀信仰の旺盛な一面を覗ひ得るからである。

猶ほ一行の見たのは模本であつたけれども、寺には元亨三年に畫いた國寶の寺域圖を藏してゐる。之を見ると寺が最も榮えた頃として、淨池を前に堂塔相並び、坊舍軒を接する盛觀である。然し縱、前後に並んだ金堂と講堂西に離れた三重塔婆の外、堂宇としては尙金堂の東方に十王堂、行堂、講堂の後方卽北方に兩界堂護摩堂等が數へられるに拘らず、阿彌陀堂、釋迦堂、彌勒堂などの名は少しも見當らない。勿論この圖は一山完成した時の狀景であり、彼の草案は金澤氏三代に於る完成への道程を記したものであつて先の三堂の或者は其の儘此の圖の伽藍配置に於る金堂なり、講堂なりに當り、若しくは改築

されたとも言ひ得るであらう。然し三堂悉くまで消え失せるとは如何であらうか。果して此の圖の他の何れかの堂宇が此の解決に資し得るであらうか、今は資料の關係上之以上言ふ事は困難であらう。

造營に關しては猶ほ前河内守助良が八月十三日附書狀に、稱名寺鎭守造營料として六浦大道を一年知行すべき事を傳へたものもある。而して貞和三年四月十九日附足利直義御教書に、稱名寺住持職が極樂寺長老の舉狀によつて定めらるべきを言へるは、早く元亨三年の古圖にも極樂寺長老忍性大德の署名あり、共に極樂寺との關係を示すものとして、この事も當寺の緣起上注目される。

以上の外文書では文永六年十一月三日附顯時の寄進狀が、見たものゝ中、最も古く、實時が同十年三月廿九日世戸堤内殺生禁斷令の施行を命じたもの之に次ぐ。次に貞顯奉元亨四年八月廿五日附幕府御教書が稱名寺長老宛で、天龍川、下總高野川兩所の架橋を命じてゐるのは、此の頃にも僧侶と架橋との關係附けられた事例が知られて面白い。更に貞和五年二月六日附の高師冬の卷數の謝禮、四月八日附の惠源の同上及び文和四年四月十七日附義詮、同五月六日附の尊氏の祈禱を命じたものもあるが此等と異つて、正和三年八月廿七日附幕府下知狀に伊勢國守護領莊園方地頭代淨慶の訴出を裁判したものある事は守護領莊園の存在を確實に裏書するものとして見逃せないであらう。

有名な文庫の事は元亨の古圖には何等記されてゐないが、勸進帳草案には見える。然し早く滅んで今は跡形もなく、文庫谷と傳へるところは稻田と化し、其の書籍亦全く散逸し去つたのは悲むべき限りである。今こゝで僅かに見得たものは、平安朝時代の國寶文選寫本斷簡と、忍性の朱印ある宋版藏經の斷片、及び北條氏綱納經の一部にすぎない。之には斯一藏眞詮爲先婦養珠院宋榮莊嚴報土、大永戊子孟秋平氏綱花押（阿毗達磨大毗婆沙論卷第二十九）と見える。

其他、文庫關係のものとしては、文祿三年甲午八月十四日の武州久良崎金澤之稱名寺領田畠帳や、寶永二年十月廿六日の金澤の稱名寺水帳には、例へばぶんこ中畠九

畝廿三歩、甚十郎作とか、中畠九畝廿四歩ぶんこの入小野原なぎゝ見える。

十一時一行は逗子行の自動車に乘つて寺を出た。陳列室にゐる間一しきり襲つた時雨も今は止んで鎌倉で汽車を降りたのは十二時頃であつた。一行は午餐をすまして鶴ヶ岡八幡宮に參拜、直ちに今日午後の主目的なる國寶館に入る。館は最近神社境内の一隅に建てられたものでこゝで三浦教授の紹介に依つて偶然來合せられた同館の設計者岡田信一郎氏の説明を聞き得たのは意外の幸であつた。館内は部屋を仕切らず、思切つて廣い一間としたもので、採光は充分であり、寧ろ光線が入りすぎて、陳列品の保存上には心配な點があるとは設計者自身の告白であつた。

陳列品は周圍と中央とに配され、周圍の前半は書畫、後半は彫刻、中央は主として工藝品、少數の文書と言ふ割當である。陳列品は豐富であるが、其の中目についたものを年代順に拾うと、平安朝初期のものでは唯一體蓮乘院の阿彌陀がある。僅か尺にも滿たぬ小座像ではあるが、此の時期特有の鋭利な力法を示す此の像は、其の彈力ある堂々たる體軀、柔和の中に鋭さを含んだ其の面貌と相俟つて、確かに逸品として推すに足る。藤原佛も土地柄稀で、數體にすぎなかつたが、先づ證菩提寺阿彌陀三尊、極樂寺不動が目につく。

以上の少數を除いては殆んど全部鎌倉期のものであるが、此等には胎内銘若しくは願文によつて製作年代の明らかなものが多く、研究上資するところが少くなかつた。

先づ丈六阿彌陀の巨像が中央陳列部の最前端、入口眞近に安置されてあるのは、その位置と、大きさとの爲に何人の印象にも長く殘るものであらう、作も相當によい。此の反對の端卽ち最奥端にも、後向に之とよく似た、然し今少し小さな藥師座像がある。之に對し、小さくて目につくものは寶金剛寺の誕生佛であらう。高さ五寸許り、其の逞しい風貌は餘り他に見掛けない。

此等は無銘であるが、有銘のものでは先づ建長三年佛師幸有作の圓應寺初江王坐像附但生神像二軀が擧げられ

る。豪放な作風と、一には類品の比較的稀な爲、人のよく知る所である、文永五年の銘ある極樂寺の釋迦十大弟子像も亦同樣注意に上る。然し別の意味に於て人の目を惹くものは圓覺寺の銅造阿彌陀三尊立像であらう。その表現精神なり、細部の手法は姑く措き、全體の形式に於ては、木彫に見る普通の鎌倉樣式と相似ない。それは確かに古き飛鳥形式の復活である。而して銘文は本尊の背面に文永八年十月十九日四十八日鑄奉、鑄物師賀茂延時と鐫られてゐる。此の脇侍像と同形式で、時代も略同時かと思はれるものが大和壺坂寺にも見出されるが、最古の例は恐らく東京博物館の三尊であらう。彼の中尊の背面には「善光寺如來一光三尊　于時建長第六甲刁正月廿日、下野國那須御庄內東興世村、勸進上人西忍生年廿七、奉安置之、依夢相之告鑄模之」と鐫られて、此の特異なる形式の由來を雄辯に物語り、こゝにも亦、當時に於ける阿彌如來陀信仰の一面に觸れ得るのである。次に一行の視線を集めたものに寶金剛寺不動の小像がある。然しそれは作の爲ではない。本館主任の相澤氏の注意によつて、胎內に水晶舍利塔と種々の奥書ある多くの經文を藏する事を知つたからである。例へば大毘盧遮那經心第四には於鎌倉二階堂杉ヶ谷勝福寺書寫定聖花押、佛師鎌倉扇ヶ谷主計賜香衣法師覺雄造之とあり、其他延慶二年、永仁二年、天文六年、享保八年、寛延二年等の奥書あるものが次々取出されたのには一驚を喫した。今一つ五寸許りの小像ではあるが稱名寺出陳の永仁五年二月廿七日、藤原秀吉の銘ある愛染明王は、その精巧さ人の目を奪ふ。それは頭部と言はず衣文と言はず、手足の指先に至る迄如何なる微細な點にも周密な注意が行ゝゞいて一々丹念に仕上げられたものである。

足利では初期に屬する明月院の上杉重房の像が一行を喜ばせた。其の肖像彫刻として神品たるは海外にも知られ定評あるから今更贅言を要せない。

以上とは稍異つて鎌倉時代に盛行し來つた石造彫刻の例を私達はこゝにも見出す事が出來た。九品寺出陳、永仁四年卯月八日の銘ある藥師半肉彫と金剛寺出陳、海藏寺嘉元四年の銘ある板碑がそれである。後者の阿彌陀來

迎圖の陰刻は他に見掛けぬ面白い意匠と思ふ。又此等と共に木製五輪塔が置かれてゐて、形式上鎌倉とすべく、東秦野村田原にある源實朝首塚と傳ふる所に建てられてゐたと言ふ。

文書は極く少く、後醍醐天皇綸旨として、嘉暦二年四月廿七日攝津國兵庫渡邊神崎三ヶ津商船の目錢に就き、諸社の神人供祭人供御人の對捍を停止し、大佛殿拂菩の料として、向八ヶ年間關務を執るべしと命ぜられたもの及び祈禱の誠請を抽んずべき事を命ぜられた元弘二年六月十五日附のもの(共に極樂寺出陳)があつた。

豫定の時間は既に盡きたから、一行は唯鎌倉時代の優品たる光觸寺頗燒阿彌陀緣起二卷と、明月院の中峰國師像に繪畫のすべてを代表せしめてこゝを出る。時に三時過。先づ山の内の建長寺へ向ふ、此の寺も古い木立に似つかはしい茅葺である。一行は自動車を賃して圓覺寺では舍利殿を見た後國寶の梵鐘を打眺めた。幕府の跡は昔を偲ぶよすがもなく、英雄頼朝の墓に詣でては意外にもさゝやかな荒れた姿に暫し感慨無量なるものがあつた。其

の高からぬ墓塔は傷き後に廻れば燈籠は倒れたまゝ、石柵の上邊は摧け落ちてゐるのである。寶戒寺や日蓮上人辻説法跡は車上に見つゝ、次に東勝寺裏の北條氏滅亡の跡を弔ひ、更に車を長谷の大佛に馳せた。木立を背景にして蒼空を御笠と被た巨像は確かに一偉觀である。唯第一印象に何となく不安の伴ふのは上體の稍大なる爲であらう。側面の姿勢は餘りよくないが、面相はこの方が勝れ、正面の雄偉なるに對して、こゝには彌陀に相應しい慈悲温柔味もよりよく感ぜられるのである。こゝを去つて最後に由井ヶ濱に降り立つ。直ぐ右手につゞくは稻村ヶ崎、海面を隔てゝ向ふには材木座が望まれひた〳〵と打寄する浪は轉た我等が懷古の情をそゝり來る。斯く此地の見學を終へて東京に引返したのが五時であつた。

十八日(金)　東京帝國大學圖書館、東京美術學校、東京帝室博物館、東京帝國大學内史料編纂所。

午前八時東大赤門内に集合圖書館を見る。堂々たる外容に相應して内部亦壯麗である。手荷物置場、閲覽室、書籍出納所、カード箱等を順次に見て行く、すべて便利に

都合よく出來てゐる。殊に閲覽室に自由閲覽室を設けた事は姑く措き別に廣い一室に雜誌新聞を豐富に備へ附け自由に閲覽し得る樣になつてゐるのを氣持よく眺めた。

導かれる中に何時の間にか屋上露臺に出て眺望を逞うしそこから降りて陳列室に出でた。廣い室はがらんとして未だ何程も入つてゐない。一隅に横文字の珍本などが少し並べられた中に、病草紙も披げられてゐた。之と隣つて考古學參考品も陳列されてゐるが、時間の都合上午後に讓り、九時こゝを辭して東京美術學校に向つた。

東京美術學校では公開前の陳列館を私達の展觀の爲め特に便宜を與へられたのは感謝に堪へない。館は二階建であつて、階下には佛像彫刻、土中發掘品、燒物類が陳列され、周圍の壁には洋畫が懸けられてゐる。

佛像には支那六朝や我が飛鳥時代に屬する金銅の菩薩小像を數體數へ得るが、其等よりも所謂白鳳期と思はれる一體の金銅釋迦侍像が私達を惹きつけた。奈良平安兩朝のものは殆ど見當らないが、其の代り例の淨瑠璃寺吉祥天厨子が異彩を放つてゐた。此の厨子の後壁内面には

艶麗な八臂の辨財天女を中心として、四方には上に直立の勇壯な二武神、下に半跏の之亦艶麗な二天女が描かれ其等は天平の樣式と藤原の精神とを併せ有する事に依つて議論あるところであるが、それは今姑く之を措き、此の豐麗優雅其の物の背景は誠に彼の婉姿を以て聞えた本尊に相應しい。鎌倉期では何よりも定慶の多門天を擧げねばならない。澎湃として迫り來る雄渾な氣魄にこそ少しく缺けたれ、其の勇壯な顏貌と、颯爽たる姿態とは前に立つ者をして思はず快哉を叫ばしめずにはおかない。而して首枘にある此佛者肥後別當定慶造也貞應三年五月十四日の墨書銘は愈其の造像史上に於る地位を高からしめるものである。次は近頃安阿彌陀佛の銘が發見された快慶の大日如來坐像であらう。彼としては比較的穩和な作風の樣に見られた。この外に私達の足を止めしめたのは一體の粗末な小地藏像であつた。之には長祿四年庚辰九月廿六日宇陀郡西山邊之惣社鄕本地五體之内との墨書銘あつて、神社の本地佛たる事を明らかにしてゐる。

支那出土の明器類の中にも優秀なるものも少くない、

中に唐代の立女俑や馬の像に特に推賞すべきものが見出された。又此等と共に珍しくも燉煌出土と言ふ二體の菩薩像も並んでゐたが其の重厚性の强い表情は私達の氣持に合致し難い多くのものを有つてゐる。

樂浪出土の銅管一個の中には木身が入つてゐる。長さ一尺許。管の表面には複雜巧妙を極めた龍虎等獸類の繪が纖細な金線を以て一面に描かれ一見人の目を奪うた。

壁の洋畫は明治洋畫界の先達高橋由一の傑作と知られた鮭圖や、五姓田芳柳の西南戰役臨時病院圖を始め、明治初年の洋畫を代表すべき作品が相當多く見掛けられた。

二階の古畫室には有名な因果經を始めとして、藤原期のよき佛畫をも一幅見出す事が出來た。如意輪觀音の像で、畫風、色調は同時代の他のものと別に異ならないが唯此の類の作品に於て常に感ずる藤原期特有の優美高雅な温味に滿ちた雰圍氣に、こゝでも觸れ得た事を喜んだ。傳信實筆雪中行幸繪卷は其の着實な確からしい筆致賦彩の外、風俗研究上にも參考となるものであらう。雪舟の群馬圖は墨繪の草畫ながら、群馬の集へる情景を面白く寫し出してあり、乾山の鯰圖は飄逸洒脫なこころを取る。浮世繪には歌麿の諷刺的な美人圖があつた。春章の傾城圖も併記しておくべきであらう。

此等と共に奈良時代の寫經として金光明經の斷片があり、又延喜五年の觀世音寺流記資財帳三卷も展べられてゐたが、其の賤口章に、家人壹拾參人、大男肆人、大女玖人として、次に各人の說明をしたものを見ると、諸主女年五十九丁女右一人、父得侶麿、母婢諸眉女等所生、と言ふ風になつてゐる。之は天平十九年の法隆寺資財帳にも明らかに奴婢と區別して家人と標出しながら其の實際の內譯は奴婢部と同じく奴何口、婢何口と註してゐるところから見ると、かうした慣例であつたらしく思はれるがしかも、令の規定では階級的に區別あるべきものに對しかく同一の名稱を以て呼んだと言ふ事は家人の性質を考へる上に一の注意を促すものではなからうか。

こゝを出てから一行の爲め特に別館にある有名な三つの逸品を見る事が出來た。永德の松鷹圖、常信の桐鳳圖

芳崖の悲母觀音がそれである。永德の屏風には各隻に永德眞筆永納證之と記されてゐる。さなくとも之を疑ふ人はあるまい。實に此の金碧裝飾畫に於て私達は桃山時代に於る雄大豪放の精神を遺憾なく味得する事が出來る。畫面全體に延び擴がつた其の巨松、其の岩石、殊には此の繪の眼睛たる鷹に於て、何と言ふ大なる力と氣魄とが包含されてゐる事であらう。其の前に立つ時壓せられるが如くにして、しかも又何處からともなく生氣の體內に充滿し來るのを覺えるのである。翻つて常信の屏風に對する時、其の練達した流麗な筆が如何に弱々して食ひ足らず感ぜられる事であらう。餘りにも甚しい精神の隔りには唯々驚くの外はない。悲母觀音は芳崖が死の精力を注いで書き上げた神品として何人も知るところである。今や功德水の淨化を受けつゝ將に下らんとして振り仰ぎ見る嬰兒、之を見下す觀音の慈愛に滿ちた氣高い面持、兩者の融合するところ人をして息詰まる感あらしめる。

博物館では今御遷宮式に因んで鏡と劍と玉の特別展覽がある。それを見るのが一行の目的なのである。こゝでは後藤守一氏の透徹明快な說明を聽く。

先づ第一室には第一函と第二函に漢代の蟠螭文鏡、內行花文鏡、TLV式鏡以下、三國六朝、隋、唐を經て宋に至る各樣式の鏡三十餘面を年代及樣式順に列べて、終りに數面の朝鮮高麗鏡を加へ、之と相對した第三、第四函には日本鏡を例の大和吐田鄕村出土の兩鈕細線鋸齒文鏡を先頭に、上古時代より德川の柄鏡に至る四十餘面を配して日支兩鏡の關係と夫の年代的變遷を示した上、第二室には又別に各時代の種々な樣式のものを夥しく陳列してある。其等の中には寫眞等で見覺えある大和河合村出土の家屋文鏡、上野出土の狩獵文鏡、更には御物の伯牙彈琴鏡、蟠龍八花鏡、海磯鏡も見出された。又第一室には別に其の製作過程が實物を以て示されてゐる。

玉顆は第二、第三兩室中央の覗箱に陳列され、これもその製作過程が第一室に寫眞で示されてゐる。之は濱田教授の報告を用ひられたこの事である。

刀劍に當てられた第三第四室には古刀新刀の數々が皎々たる光を放つ。其等は古刀は備前物と京物とに、新刀

は上方物と江戸物とに分ち、更に小分して夫の區別を知らしめ、別に上代以來の刀身の形式や拵に就ても一劃を設け、更に兵仗太刀、等のものまで各種の實物を以て示してある。製作過程の說明は一部は實物一部は職人盡の模寫によつてなされてゐた。

終つて別室に特に陳列された古書籍、文書及び古墳發掘品の珍しいものを展觀した。古書の中では玉屋本日本書記は應永、永享年間良海書寫の奥書を有し、又此の書傳來に就ての面白い逸話がある。催馬樂抄は平安朝の古いもので、天治二年春三月附家說移野了口傳已祕藏也不可有外見歟この奥書が見え、外に本朝現在書目錄の古寫本もあつた。

文書は御物の法隆寺獻物帳と朝鮮來聘文書で、前者は人も知る如く孝謙天皇が先帝の御冥福を祈らん爲御遺品を寺に納れ給ふた時の目錄であり、天平勝寶八歲七月八日の日附で藤原仲麻呂、永手以下葛木戸主等五人が自署してゐる。

古墳發掘品には肥後發掘の刀身、十二支獸帶甲の外實

に奇拔な形をした齋部土器があつた。卽ち切妻の家形をして、其の片屋根にはすばらしく大きな喇叭形のものが附加されてゐる。神代放送局との評言に一行思はず笑聲を擧げた。午後は更に展げられた二卷の繪卷について田中一松氏の說明を聽いた。一は七枚つゞきの住吉物語で詞書はない。繪は戀する姫君の穩れ家を夢に知り得た四位少將が唯一人の供人を連れ、足を痛めつゝ遙々住吉まで尋ね行くところから、琴の音を耳に愈住家に辿り着き漸くにして姫君に對面するあたりを畫いてゐるが、同一畫面、同じ屋根の下に同一人物を二樣三樣にあらはす繪卷物特有の表現法は矢張りこゝにも認められる。時代は鎌倉末期、此の手のものとしては可成りの出來である。今一つの清水寺緣起(上卷)は非常に長い、之は信胤卿記永正十四年九月十七日の條に清水寺緣起繪詞、余清書三十三段內五段分遣甘亞相、依彼卿傳達也、繪土佐刑部大輔光信朝臣畫之、に該當するらしく、光信時に年八十才頃か、詞書は信胤、甘亞相卽ち甘露寺大納元長の外、今一人、少なくとも合せて三筆位あるのではないかとの事

であつた。併し兎も角時代と作者の略明らかな點は注目される。尤も土佐三筆の一とは言へ作其のものとして繪卷物の衰頽期だけに、それ程優秀なものとも見えない。其の畫中の清水で音羽の瀧に打たれて祈念せる男女の樣も興深いが、更に卷末の方、坂上田村麿の蝦夷征伐にあらはされた蝦夷の武具、服裝が甚しく後の元寇などの元兵に類してゐる事も滑稽であると共に、又一種歴史的感興をそゝるものがある。

かくして豫定の時刻は遂に一時間も過ぎ再び長い道を歩いて先の東大圖書館内に在る史料編纂所に着いたのは二時、こゝでは始めに辻博士から關係史料を前にして篇纂事業に就いての說明があつたが、新に發見されたといふ塙史料殘稿の後宇多天皇より正親町天皇に至るもの數册も置かれてゐた。和田博士の前には公任自筆の北山抄十卷や經光の日記、それに尊圓法親王が上皇に出された麗しい御筆の跡など並んでゐたが就中最も珍しいものとしては後鳥羽院と土御門院御贈答消息一通で、何れも御諱を記されてゐるのは稀有のものであらう。

次に龍編纂官の說明されたものゝ中東寺百合文書に屬する左京七條の或土地の五通の賣券は日附が夫々延喜十二年七月十七日、(之には十九年の讓狀附けり)延長七年六月二十九日、天曆三年四月九日、天元二年十月二日、正曆四年六月三十日とあり、十三年乃至三十年の短期間毎に轉々と賣却されて行つた跡を辿り得るのである。賣券の形式上其の天元以下には最早從來あつた左京職の印判が見られないのは手續の簡略と言ふ單なる一事ではあるが時が時であるだけ王朝政治の弛廢し行く一の姿をこゝにも見出し得る樣に感ぜられる。又莊園問題で人の引用する丹波國大山庄に關する文書も之と並んでゐた。日蓮の書狀はさじきの女房御返しと言ふのと弘安二年九月二十二日附伯耆殿宛の二通があり、前者のかたびらの布を贈られたに對する返事に熱烈な宗教家の態度が偲ばれるものであつた。

岩橋編纂官の前には大乘院日記目錄も出てゐた。其の長慶院崩御の條にて指し示された應安六年八月一日の條は大覺寺法皇崩五十二號長慶院と見えるが此の記事が絕

對的に價値あるや否やに就ては議論あるところである。更に中院通重日記及別記を見て、次に高柳編纂官の說明に入るゝ後奈良及正親町兩天皇御親筆の着到和歌や家康から其の女奥平信政夫人へ宛てた消息があり最後に探幽筆と言ふ山王祭圖の大きな屏風が立てられてゐた。其の江戸城に本丸があり、御三家が堀內にある事、宮崎織部の附箋がついてゐる事などから此の繪が明曆二年六月十五日山王祭の圖であり、且紀州家の特に大きくかゝれてゐるのは紀州家で畫かしめたものであらうこの精細緻密な考證に興味を惹いた。

一行は考古學教室からの招に應じて名殘惜しくもこゝを辭して同教室に赴く。陳列物に我國始め東洋、西洋の發掘品其他印度南洋の石佛ある車は別に我が京都大學と發りない。其の中樂浪發掘王盱墓木棺、南滿州牧羊城附近發見三連甕棺に就ては原田助教授の說明を聽いた。其他二個の興味ある疎瓦は、共に單辨、八葉、七蓮子で、法隆寺出土の物に類似する。之は支那南京秀山公園內地下十尺より出で法隆寺の瓦當文樣が南朝と關係ある事を事實的にも跡づけ得られるこの說明でめつた。

忙しかつた今日の見學もこゝに愈終りを告げた。此夜は東京帝國大學國史科の主催に係る樂しき交驩會が催され、黑板、辻兩博士を始め、同學諸兄と膝を交へて歡談し乍ら愉快なる半宵を過す事が出來た。

十九日(土)　足利學校、鑁阿寺

午前六時四十分淺草驛發九時近く足利に着けば園山氏が迎へに見えてをられ、氏の東道で足利學校に着いた。

學校は舊敷地の東半を小學校に取りこまれてゐるが、主要部の西半は舊圖の形式をよく保存してゐる。一行は入德門中門を經て杏壇門横の事務所に至り、先づ藏書陳列室に入つた。長方形の此の室は左程廣くはない。それに覗箱を三列に並べ諸書を披いて陳列してある。

一行は特に硝子蓋を開いて自由に手に取つて珍籍を見た。百種許りもぎつしり列べられた書籍はもとより漢籍を主として國書佛書が僅か數種を數へるにすぎない。寫本と版本とは殆んど相半し、版本には宋、元、明の支那版の外、朝鮮版も可成りあり、我國では五山版慶長足利

版等がある。此等の書が珍書として世に喧傳された事は既に年久しく、殊に李中正撰周易傳、梁皇侃論語義疏、古文孝經孔子傳は清朝四庫の缺を補つたものとして有名であり、宋版周易語疏、宋版周禮、古文尚書孔子傳、超註孟子、歙書記講義、孝經抄、史記抄等の古寫本等も亦人の推す所である。

此等の書には殆んどすべて識語、跋文があつて有益なものも多いが、宋版尚書註疏、同毛詩註疏、同左傳註疏同禮記正義には每冊首に「足利學校公用」「此書不許出學校闈外憲實花押」「上杉安房守藤原憲實寄進花押」とあつて、本校再興者の餘勳を今に傳へてゐるのは誠に意義深く感ぜられる。尚同族者では宋版註疏に憲忠、明版後漢書には憲房寄進の署名あり、元版歴代十八史略も憲房の遺命によつて寄進された事が上卷末の識語によつて知られる。又宋版文選は永祿三年後北條平氏政の寄進で、署名の上に大きい虎の印を捺したのも注意を惹くが更に之には每冊金澤文庫の黑印もあつて、彼の文庫本の散逸が早くもこゝに見出されると共に、稱名寺に於て此の祖氏綱の大永八年の奉納經を見出した事が思ひ合された。此の金澤文庫の印に對して、こゝでは「足利學校」や「野之國學」の印を捺し、さもなくば多く「足利學校公用」とか、「下野足利庄學校常住也。」「下野國足利」などと墨書して其の所屬を明らかにしてゐる。

此の外六韜や三略の冊首に夫々後世之爲英俊武勇者宜玩味熟讀於此書とか大矣哉此書也、夫何則陣法正整策略肅然焉と記してある事も面白く、又多くの庠主の寄附、書寫、校合に關する奥書も頗る豐富であるが、其等の奥書の中最も興味あるものとしては慶長版貞觀政要のそれを擧げねばならない。之は初めに家康が活字を學校に寄せて諸書を刊行せしめた事に對し、家康は唐の太宗を恭ふ方であるとて其の功を讃嘆し、それだけならば他の慶長版にも同樣の文があるが、こゝでは更につゞけて宜也豐國大明神際辭下土之日。受令嗣秀賴幼君賢佐遺命。爾來寬厚而愛人。聰明而治衆。不異周勃霍光安劉氏輔昭帝也。矧又海內弘此書。而協和士民之之心。則爲明神不忘舊盟。爲幼君盡至忠者。其用大矣哉と述べ、慶長五年星

輯庚子花朝節、前龍山見鹿苑承兌謹誌と記してゐる。彼の文を讀み此の日附を思ふ者何人か感慨之を久しうせざる者があらう。旬月後の承兌の感想果して如何であつたらうか。

此の室を出てから別室で學校の雜記を見た。其の享保十四年四月の條に大宰彌右衞と申儒士聖堂拜度旨金地院より申來事と標記して金地院の紹介狀を載せてゐる。それは彼仁參られ候はゞ粗末なき樣想應待遇さるべしと言ふので宛名は學校としてゐるにかゝはらず文中には貴寺などゝ書いてゐる。之によつて當時金地院の支配に屬してゐた事がわかる、次いで二十七日參着孔子堂拜謁祭器繪にかけりとあり、時に祭器毀れてゐたれりとも記してある。

次に聖堂に上る。桁行五間梁間六間、四注作の重層、寬文の造營に係る簡素な建物である。內部は板を張り、奧壁に接して三壇をしつらへ、中央には孔子の像を安んずる。此の像は周知の如く胎內に天文三年庚申之日初刻之明四稔秋八月上丁忌畢矣の墨書銘あつてその意味からも

注目されるが、實際孔子像などゝでなくては見られない。別段固苦しい形式を取らず、布衣に頭巾と言ふゆるやかに打解けた姿に表はされてゐるのは仰ぐ者に親しみ易く、其の面貌も之に相應しいものがある。本像の左古には子思、孟子、顏子、曾子の神儀が配され、更に向つて右壇には學校の傳說に因んで小野篁像と稱する像がある。左壇はもと東照權現の神儀が置かれてゐたとか。而して壇の前面には縱に左右相對して二脚の細長き臺を据ゑ、上に釋典の具が配置されてゐる。其の傍には琴笙などの樂器も出てゐた。

十一時半學校を辭して程遠からぬ鑄阿寺に向ふ。杉檜その他巨樹老木の茂つた寺域は豫想外に廣い。其の周圍に幅二間餘の堀を廻らし更に內側に接して高さ一間餘、幅三間許りの土壘を備へてゐるのは往古豪族の邸宅形式を覗ふべきものとして注目される。堀にかゝつた橋を渡つて南門を入ると正面に五間四面の本堂がある。天福二年の建立と言ふけれども、打見たところ向拜はもとより外廻り全體に相當後世の手が入つてゐるが、素人目には

それとわかり兼ねる。然し其の右方に少し離れて立てる鐘樓は破風の小さく軒の出の深い輕やかな入母屋屋根とすつきりした組物とに私達の胸を打つものがある。よき古建物の稀な關東地方であるだけこうしたものを見得た事は又となく嬉しい。此の兩建の間にある一基の石塔は木食上人一ヶ國一寺第二十八番の塔と聞く。庫裡で食事を濟まし直ちに二階へ上ると、間の襖をはずして二室をぶつ通した廣い陳列場には壘の上から壁面まで所狹しと文書、書類繪畫、古墳發掘品等が並べてある。

先づ上り口に最も近い壁には寺傳義兼及義氏と言ふ二幅の畫像が掛けられ、次々に掛物が並ぶ中に、元和頃に畫くと言はれる寺の古圖もあつた。縱横各々六尺餘の淡彩圖で、之を見ると堀内の主要建築は今と殆んど變らない。然し堀外なる今の民家地には當時塔頭が十餘坊も存した事が知られる。之と少し離れて幅一尺五寸長さ一丈許りの細長い紙に細々と大小の文字を認めたものがある近寄つて見ると之が大御堂(本堂)棟札の寫しで、それには、奉做起方五間大日如來大殿一宇と冒頭して次に天福貳年正月十六日市鋼、同二月十九日立柱、同孟夏朔七日上棟と記し、大檀那從五位上左馬頭源義氏以下大行事、大勸進、大工の名を連ねてゐる。此の寫しは更に下方に從貞應二年至正應四年六十九年也、自天福二年至正應四年五十八年也などゝ外にも正應四年を基準として數へてゐるところから此の年の寫しと思はれるが、こゝに本堂大御堂の建立者が鑁阿寺の草創者と言はれる義兼でなく、却つて其の子義氏なる事は此の寺の成立を考へる上に興味ある問題を提出するものと言へる。

一面に陳列された文書中最古のものは又此の義氏の出せるものである。卽ち寶治二年七月六日附大御堂供僧宛で堀内大御堂四壁之内童部狼藉、市人往反、牛馬放入三ヶ事を禁じたのであるが、其の鑁阿寺と言はず常に堀内大御堂なる名を使用せる事は、此の寺の成立が當初よりの純粹なる寺院でなく、邸宅の寺院化であると言はれる事に關係附けられるものであらうか。其の後稍下つて文永になると六年四月に泰氏の定めた定書があり於當寺永代不可違背條々事として供僧專恒例臨時勤事、年中行事以

下七ケ條を規定してゐる。寺基愈固きを加へたのであらう。

其他寺領、堂の修築、祈禱等に關する實に夥しい文書は一々枚擧に暇がないが、流石足利氏の氏寺だけあつて貞氏、尊氏、直義、氏滿、持氏、成氏等の書狀が見出される。

書籍類には文永の奥書ある宋版一切經殘篇、永正十年二月妙珍釋尼寄進の法華經、論語古寫本等があり、最後に東京帝國大學總長渡邊洪基寄附と銘打つた古墳發掘品が數箱あり、之は故坪井博士が大學院學生時代に始めて發掘されたものと聞いた。三時十分寺を辭した。圓山氏が終日一行の爲案内の勞を取り、種々便宜を圖られた事は一行の深く感謝するところである。

二十日(日)　濱離宮、憲法記念館、明治神宮繪畫館

愈最後の日となつた。朝から細い雨がしと〳〵と降つてゐる。九時濱離宮正門前着、横手の小門より入つて案内さるゝまゝ暫く林間の道を傳ふて行くと左に可美眞手命の御銅像が見上げられる。之は明治天皇御大婚二十五年の御祝典に際し陸軍省より献上したものである。やがて池の近くに來ると右に燕の茶屋、左に鷹の茶屋あり、其の間を經て少しく行けば松の茶屋に至る。此の池を廻る樣に道を傳つて行くと忽ち眼界開けて遙か水平線の彼方迄見通される。近くに目を移すと左方には船舶が群り、右手はもとの芝離宮の跡である。既に廢された此の跡は今一行の立てる間近まで埋立てられたとの事である。すぐ後の小さな盛上地は潮見茶屋のあつた跡とか。

次で池邊に出で傳橋を經て池の眞中に淨んだ中島御茶屋に上る、此の御茶屋は立面頗る複雜で高低種々なる形式の屋根が集められてゐるのも面白い。平面亦單純ではない。内部の造作はしかし極めて簡素で何の飾もないのは却て何となく一種嚴肅にも似た感じをおこさせる。硝子障子かすべて枠を黑漆塗とし、下方の一部に襖を殘してあるのは明治初年の風と覺えて興深い。御座所は全建築の中央にあつて三間に二間、簡素な事他の室と異ならない。池に面した二間と陪從者室との間の三間を襖附の硝子障子とした外、他の二間の部は襖、三間の部には奥

に一間の襖があつて御衣更の間に通じ、次が半間の杉戸、それに隣つた一番前方の一間が本床となつてゐる。床の奥行は二尺に滿たぬ狹いもので壁は他の小壁と共に金砂地の襖、脇板には蔓草の透彫がある。内部の調度は大きな衝立が唯一つ、外は何もない。此の室こそ今より正しく五十年前明治十二年八月十日明治天皇が米國前大統領グランド將軍と二時間に亙つて御會談遊ばされた所である。三浦敎授は其の際將軍が如何に誠心を籠めて天皇に種々なる御忠言を申し上げたが、そして天皇がそれを如何に大御心に銘じたまひて事ある毎に思ひ出させられたかについて話された。一行は天皇、將軍と、それに三條公及び通譯吉田公使の姿を在りし日のまゝなる此の室に描出して感慨一入切なるものがあつた。

歸りは反對側の轉橋を渡て燕茶屋の前に出で元の道を經て門を出たのは十時過であつたらうか。

次に明治神宮外苑なる憲法記念館に行く。之はもと赤坂假皇居にあつたのを後御取毀ちの際、時の樞密院議長伊藤公に賜ひ、後神宮造營に當り東京府の手を經てこゝに遷されたと言ふ。

憲法會議の開かれた意義深き大廣間を始め、内部を一巡して更に外廻りをも巡つた後更に繪畫館に入つた。

内部は外觀にも增して壯麗である。明治天皇の御一代繪はしかし未だ一部しか出來上つてゐない。とりぐ〜に思出深き中にも病床の岩倉公を親しく御見舞ひ遊ばされた岩倉邸臨幸圖は私達の胸臆にひし〳〵とこみ入る嚴肅さを持つてゐる。思ひは同じと見えて此の前に立止る人が最も多い。其の側の憲法會議の繪は今しがた見て來た廣間がそのまゝ畫かれ嚴肅なる光景感銘深きを覺えた。

正午青年會館にて食を共にした後自由行動をとり、午後八時二十五分の汽車で歸學の途に就いた。

終りに前後一週間の見學に當り、一行の爲寶庫を開いて見學の便を與へられ、又貴重な時間を割いて說明其他の勞を執られ、多大の稗益を與へられた諸賢に向つて心からなる感謝を捧げて此の稿を結ぶ。〔古住〕

◉大和各地考古學研究旅行記

昭和五年三月九・十・十一の三日間、我々京大史學科考古學科學生等十名は濱田教授・梅原講師の指導のもとに大和各地に於ける考古學的遺蹟遺物の見學旅行を試みたり。今その概要を記して他日同學の士の此等古蹟の踏査を企てらるゝ時の參考に供し、併せて此の行の記念となす。

第一日　朝八時半京都驛發奈良電車にて大和に向ふ。途中窓外に展開する數々の遺蹟に就きて種々興味ある指示を受けつゝ、畝傍に着き乘換の間に、橿原神宮に詣でて、吉野電車にて十時半を過ぎる頃目的地なる吉野口驛に着く。こゝより直ちに葛村字水泥に向ひ所謂水泥の石棺を見る。此は東面せる圓墳の横口式石室の中に二個の石棺ありて、一は玄室に他は羨道に主軸に沿ひて一直線に縱列せるもの而して羨道のものゝ前後の突起部には蓮辨の浮肉刻紋あるを以て著名なり。降雨の後にて浸水の爲、うちに入るを得ざりしも幸に浮肉刻文は之を認め得

て興味を惹く。此に近く、西尾愼治郎氏邸内に亦横口式の大石室あり。この兩者は、喜田博士に依つて蘇我蝦夷入鹿の墓と、となへられしもの（奈良縣史蹟勝地調査會報告書第一回參照）その說明を聞きて、もと來た道を引き返へす。吉野口への途上の傾斜面の畑地にてふと一個の打石鏃濱田教授の目に觸れ、見れば石質はサヌカイト石にして彌生式系の土器片と共に散布せるなり。新なる遺跡を檢出し得て野外觀察の興を如實に敎へられたり。

聖德太子創建と傳ふる古瀨の巨勢寺の塔址に水拔きのある巨大なる中心礎石を見て（奈良縣に於ける指定史蹟第二冊參照）吉野口の部落を横切りて、これより東北數町の同じ葛村の大字樋野字權現堂の天安河神社境内にある權現堂古墳に到る。これは圓墳に、底部に石枕の造り附けを有する家形石棺を藏せる横穴式石室のほかに、別に直接封土に石棺を埋葬せる點で特色あるものなり。いま其石室の奥壁は破壞されて、却て羨道の閉塞狀態を見得るは面白し。たゞ石棺内の石枕は砂に埋れて充分見るを得ず、封土の一部に埋葬されてありし石棺、亦破碎し

てその一部分のわずかに本墳の傍に碑臺となりて其の面影をとゞむるのみなるは遺憾なり。吉野口驛より電車にて橘寺驛に戻り西方へ數町、阪合村大字越なる所謂越の岩屋山古墳を訪ふ。高さ二間周邊三十八間に餘る臺地に、二段に築かれたる大圓墳にて二十八尺許りの長き羨道と奥行十五尺、高さ八尺八寸の玄室から成る壯麗な横穴式石室で四壁悉く磨かれたる花崗岩の切石にて、規則正しく築成され、其の玄室は恰も家屋の内側の如き形をなし、又、羨道の入口には、もと扉を附した加工の痕の存する點は注意を惹く。同じく精緻精巧類ひなき構造を以て有名なる牽牛子塚はこれより西にて、羊腸たる路、可成りの距りあるを思はしむ。本墳は一大凝灰岩を刳りぬきて作れる室にて入口を南に持ち、室は中壁に依りて東西に區劃せられ、うちに夫婦を合葬せしを思はしむ。戸口には二重の扉の設備あり。それを覆ふ封土は二段と見ゆ。その東西均齊に分たれたる兩室が各の天井に於て示せる優美なる穹窿狀の樣、その底部の棺臺の造り出しの工合、亦は傾斜の工夫等、當時の工人の嚴肅な入神の技には自ら頭垂るゝの思ひあり。而して出土品よりしてその造り出しの台座の上に安置されてありし棺は乾漆製なりしを察せしむるはその出土品に七寶製金具あるこ共に本墳の年代並びに特種性を明示するものなりこの說明は、その構造こ併せて自ら首肯せらる。越に引き返し東の方欽明帝陵に詣でゝその傍なる吉備内親王陵内の石人を見る。此の陵前にて又石鏃土器片の散布を見出す、此より東の方。岡寺に向ふ。所謂飛鳥路の旅。路、高市村字野口に入るや道傍の右下に半ば埋沒せし、所謂鬼厠を見下し、すぐ近く左方丘上に鬼俎と稱さるゝものあり。その名稱の奇異なるに驚くも、しばし熟視せんか、故高橋博士の早く考古學雜誌に說かれし如く、俎の上に厠を覆ふことに依つて一つの横口式石棺を形造れるものなるを認め得るものなり。俎の方の前方の造作より今失はれたる石栓の形さへ腦裏に復原し得。白橿村大字五條野なる菖蒲池古墳は吾等が次に訪れし遺跡なり。此は吉野電鐵岡寺驛より岡寺橘寺に通ずる大道の左方雜木林の中にある圓墳、その細長き横穴式石室は前半を失ひて南側露出し、其の壁面に

は石灰の塗抹あり。うちに精巧雄麗なる刳り抜き式石棺二個正しく縱に並び、各の棺蓋は四注造りの屋根型にて若干の反りをさへ有する小棟を有し各内部に乾漆の附着せる處、先きの牽牛子塚の棺の乾漆製なりしと思ひ合はせて、その樣式、相對年代等の上に暗示を與ふるものとして觀ゆくうちに特殊の感興を催す。本墳に關する詳しき報告は奈良縣に於ける指定史蹟第一冊に載す。かくて途中川原寺に立寄り名高き所謂瑪瑙の礎石(實は大理石)等を見てこゝから、舊初午の岡寺詣での善男善女の群に伍して五時過ぎ、そこの藥屋なる旅舍に着き、こゝに第一日の行程を終る。

飛鳥路第二日の旅は先ず岡寺に詣でて如意輪觀音像等の國寶數點の拜觀に身も心も、爽やかとなりて始まる。岡寺より間道を南にとりて字、島ノ庄の所謂石舞臺を見る。

石舞臺の名の示す如く、それはまことに壯大なる石槨の露出せるもの、之を仰げば、屹然蒼空に聳ゆるの趣あり。もと圓墳なりし如く今に尙ほその痕跡を殘し、南面せる羨道の入口もあとずけ得、とにかく今更ら乍ら先人の營みの偉大さに驚嘆を禁じ得ざるものあり。喜田博士が曾て此を蘇我馬子の墓なりとせられし說など(歷史地理第十九卷第四號)を思ひ出し乍ら縣道を北に進みて次に同村大字岡、字酒船にある所謂酒船石に到る。道の東に迫れる丘陵上に置かれたる長さ十七尺五寸の異形の大石は、古來種々憶測を生むも未だ判然せざるもの、後、アグとなる字に同種石造物の發見ありて纔かに液體流出の用に供せられたる可しとの推察を加へ得るのみ。(奈良縣に於ける指定史蹟、第一冊參照)

これより更に北すれば數町にて有名なる飛鳥大佛の古拙なる推古佛拜せられ、名も床しき飛鳥川の流れに沿ひて下れば豐浦寺址に殘礎あり。此處は蘇我馬子が排佛の暴動に抗して建立したる豐浦宮の跡と傳へらる。寒さ嚴しき中を畔路傳ひに東の方安倍村字山田なる山田寺址に向ふ。途上、濱田敎授は又しても打石鏃を發見されて一行に示さる。寺は孝德天皇五年蘇我山田石川麿の子興志の建立にかゝると諸書に傳ふ。今一直線上に配置された

る塔址金堂址及び講堂址をあこずけ得。礎石の樣式、瓦當の文樣は所謂飛鳥時代末期に屬しその標式たるを敎へらる。藤原京の大寺たりし大官大寺址は此より元藥師寺址への途中にあるも此の址橿原神宮造營に礎石を運び去られて、今、それこ覺しき小高き壇狀の地、桑畑こなりてたゞ標識のみちたち佇めるわびし。元藥師寺は白橿村にあり、金堂址の前に東塔西塔の址、東西に並び殘りて、當代伽藍の狀を示し、そぞろ、天武帝の古へも偲ばる。午後一時神宮前に到着して飛鳥路の旅を略終へたるが前日來訪ねきたりし處、何れも憂士に依りて弔はるべき廢墟のみ。當寺の文化を、あこずけ得たりこなすには心許なしこて、此地に於ける古物の蒐集家、森田常治郎氏を八木町小房に訪ふここゝなす。氏の蒐集品中最も見るべきは飛鳥時代に屬する多數の瓦にして山田寺、大官大寺、元藥師寺、弘福寺等その址を訪ひ來りし處のもの悉く具はりて、感興の特に深きものあるを覺ゆ。氏の藏品亦彌生式土器、石器、古墳關係品にも優秀品多し。突然の訪問なりしが、同氏の歡待を受けて、各自寫眞スケッチ等に長時間を費し得たるは一同の厚く感謝するこころなり。四時辭去す。尙ほ此日の殘餘の時間を利用して北の方磯城郡唐古石器時代遺跡の踏査に當つ。大軌畝傍支線の石見停留所より十町許り東方、唐古の部落を南に外れたるこころ、卽ち石器時代遺跡にして今尙ほ石鏃土器等の表面採集をなし得るものあり。寒風に戰き乍ら、自己の採集慾にかられて時の過ぐるも覺えず。

やがて暮色蒼然たる中に濱田敎授の歸學を見送りて後一行は東南櫻井町に出で、こゝに第二日目の多端なりし行程を終ふ。

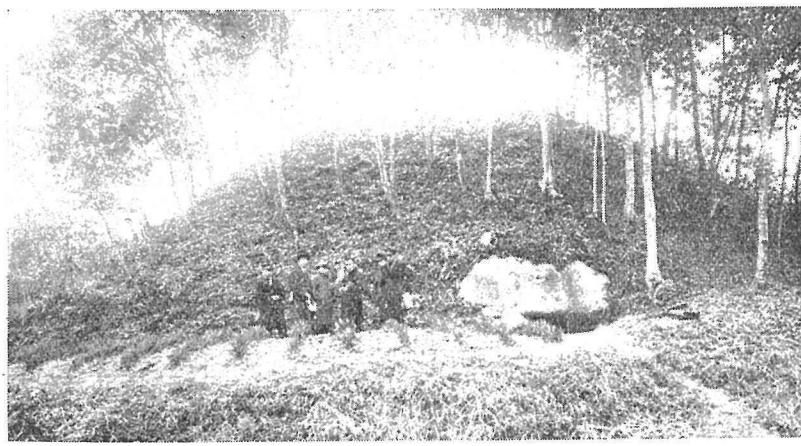
明けて第三日目、朝食もそこそこに一行は文殊師利菩薩を本尊こして有名なる阿倍文殊院に向ふ。境內に二個の圓墳ありて特に所謂文殊院西古墳はその規模の廣大なるを以て古來著名なり。(奈良縣に於ける指定史蹟第一冊參照)羨道の全長二十四尺餘、玄室の長さ十六尺餘、の壯麗なる石室にして、而も整齊なる花崗岩の加工石にて伍の目に積み、玄室の天井は同じ花崗岩の一枚石にして幅五六寸の緣を殘しつゝ中央を穹窿狀に削り上げたるな

ど、全體の雄大さと精緻さとを到る處に示す。この室、亦、正面に戸口の裝飾を作り、扉のはめこみの痕ありて越の岩屋山古墳の石室のそれとの類似を示す。同樣のもの乍ら、自然石積みの粗なる東古墳を覩き觀たる上、此の丘陵の東側に出で、其處に從來阿倍文殊東山古墳として知られし遺跡を訪ふ。墳は比較的狹長なる横穴式石室の玄室内に壯麗なる家形石棺を藏せるもの、その示す處室成りて然る後に棺を搬入せしにはあらずして、棺を安置して後、室を築成せる單墓の性質を備へたるを認めしめたる外、更に從來多く顧みられざりし墳壟の方墳なるを確かめ得たるは今次の旅行に於ける一つの大收獲とせむ。其の計測墳の一邊七十二尺、高さ十八尺、比較的封土の高きもの、いま其の正面の寫眞を挿む。室を出で、次に細徑傳ひに東南方櫻井町大字淺古に兜塚古墳に臨む。此は談山神社一ノ鳥居の東側の丘陵上にある完好の前方後圓墳、而してその後圓部に刳り拔き式家形石棺半ば埋れ乍ら存したるは古墳に於ける別個の埋葬例を示せるものなり。此處より東に峽谷を十町餘り入り込めば同じ淺古字舞谷に舞谷古墳あり。その半ば破損せる横穴式石室は扁平板狀の石英斑岩にて持送り式に積上げられ、玄室の天井を構架せるところ、支那・北朝鮮等の塼槨の形式を傳へしものと認められ興味を惹く。現存室の長さ八尺に近きを測る。あとがへりて、山の端傳ひに武内外山神社に詣でそこに保存の古墳出土品の拜觀を請ふ。中に六朝の繪模樣式神獸鏡片一個特に注意に上る。

午前の行程を終へて一行は櫻井驛に出で一時過ぎの汽車にて、その附近の大形古墳群の見學の爲に丹波市に向ふ。丹波市は天理教の本山の所在地、その旺むな經營を望見し乍ら、北して、大字別所の鑵子塚なる北面の前方後圓墳に石棺を觀る。長さ約二十六間、形壞るゝも、其の前方部に石棺の埋沒せる處に特色を示すものなり。この眞北、別所の北東丘陵の尾にあるは所謂別所の大塚にして、其名の示す如く前後六十七間を算する宏壯なる前方後圓墳なり。今その南東部、無殘に削りとられ、大凹處を呈す。もと宏大なる横穴式石室の存せしを破壞し去りしもの、室内石棺の底石のみ、里人の庭石としていま

に遺存すと聞く。もと此を圍繞せりと推せらるゝ湟の名殘りの池など見乍ら、更に東北の丘陵地をゆくこと約十五町にして、所謂石上大塚に到る。

此も同じく略〻北面せる前方後圓墳にして全長六十三間、前方の幅五十間、中央クビレ部には兩側共に正しき方形の造り出しを有し、全山葺くに礫石を以てせる二段築成の封土完存し、正面及び兩側に湟を繞らし前方後圓墳の典型的外形を示す。但し今松樹密生して實査意の如くならず。據つて、これと小徑を距てゝ、東方丘陵上に並行に横はれる端整なる同じく前方後圓墳なる八分山古墳を踏査す。前者に勝る壯麗なる墳壟にして前後の長さ約十七間餘り、前



阿倍文殊東山古墳

方の幅六十間餘あり。前方部明に三段の封土の築成を認むべく中央クビレ部の兩側なる方形の造り出し又完好に、墳丘に上れば表面を葺ける礫石完存せると共に、三重に配置されたる埴輪圓筒の痕のなほ明かに認められて嬉し。

而して此の後圓部には封土の正面と全く正反對の南側に横穴式石室の開口あり。開鑿せられたる部分に天井の一部を露出して一行の探査を待つに似たり。此の石室の位置、ほゞ封土の第一段の上部と一致する層に底面を置くを見るは古墳造營の或る場合の順序を明示するものとしてその石室の壯麗なると共に、

また一行の注意に上れり。

かくて此處に調査上肝要なる幾多の示唆を得、途中、石上銅鐸の出土地點を經て櫟本驛に出でゝ、愉快にして又有益なりし旅行を終へ歸途に就けり。〔有光〕

●史學研究會

例會　四月廿六日午後一時より樂友會館樓上に於て開催、左の兩君の講演あり、午後五時閉會した。

八幡宮の別宮に就いて

京都帝國大學助教授　中村　直勝君

八幡宮の本社に對して別宮なるものが王朝末から各地に發生したが、別宮の意味は單なる末社といふ意ではなく、垂跡說に思想的な繫がりを有するもので、本社と殆んど同格のものであらうとするのではないか、而して、それが八幡社が有する社領統制の上に如何に役立ち如何にして本社との聯絡を維持したかを見、その一例として本社とは餘り密接な關係を持ち得なかつた幡磨の松原八幡宮に就いて述べられた。

須玖先史時代遺跡に就て

京都帝國大學助手　島田　貞彥君

昨年九月の發掘にかゝる北九州所在の特殊なる墓制をなす合口甕棺の形式、分布、盛行、衰滅等に就いて述べられた。尙ほ此の發掘にかゝる調査報告は近く考古學研究報告第十一冊として刊行される。

●讀　史　會

例會　四月二十五日午後六時三十分樂友會館第一號室にて開會、三浦博士牧學士其他二十八名出席十時閉會左の報告あり。

一、決曹至要抄の著者に就て　　清水　三男君

本書の中に建久二年とあるにより明基とする說と、其は延久で明兼であるとする二說があるが、其條の內容よりすれば建久延久何れとも定め難い。八代博士は神宮本により明基說を立てられてゐるが同本が上卷全部及び中卷禁制條喪服條を有しない事は明基が完本より抄出したとの說をも成立させ得る。云々。

一、菅生神社所藏北野宮緣起について　岸本　準二君

大阪府南河內郡平尾村大字菅生神社で發見された北野宮緣起の三卷本は天地一尺一寸の普通の繪卷物の大さで三卷共に應永三十四年三月日の奥書を存し、書風畫風よりしてこの時代のものたるは疑ひない。詞書は他の北野緣起の類本と大同小異であるが北野神社所藏の承久本の詞書の存する限り殆ど同樣なるは興味が深いと共に、この緣起には漢詩文に送假名を附し又返點と覺しき朱點あるは注意すべく、或は讀本に用ゐられたのではなからうか。繪も粗末ではあるが室町時代の特徵が見えて捨て難い。云々。

一、我國古代の多數決制度　牧　健二君

明治初年岩倉公は我國に於て公議を採るは外國の模倣でなく神代にあると云うてゐるが、それは兎に角、支那から入つたものとして律令に見える太政官の會議があり印度に起源する僧侶の集會制は早く聖德太子の憲法に見え、高野山文書等には多數決が僧侶間に行はれた事が判る。武家側の多數決は南北朝頃から見え、菊池武重の「寄合衆內談事」なる文書にも窺へる。農村內の例として寬文十二年七月十五日の甲州八日町の長人入札の一冊ありて無記名多數決を行つてゐるものあり、單記もあれば連記もあり、又代筆のある事等興味ある史料である。云々。

例會　五月三十日午後六時三十分より樂友會館第一號室にて開く、三浦博士、中村、牧兩學士他二十三名出席左の講演あり。閉會十時。

一、武家政治成立に關する一考察　赤松　俊秀君

院政は政治の傳統から離れ、實際への進展を意圖した。こゝに武士の地方より中央への進出を見たが、院政は此の武士の勢力を統制する事が困難となり、殊に賴朝が公家出身の中原廣元について、守護地頭を設置して全國の土地管理を實行し、其の勢力を地方に分散し、鎌倉に於て之を統制するに至つては、院政も破綻を來した。而して武家政治成立に於ける賴朝の地位は其の敬神の敦厚に於て獨自のものがあり、其の全體抱擁の政策的なものを見得る。然し餘りに細微に分散した勢力の地方に於ける結成を更に課題とするに至つた。云々。

一、多田院と壺井權現　　魚澄惣五郎君

王朝時代の地方經濟は左程大きなものでなく、豪族の發展地は公道に直面しない防禦地を必要とした。此の點では多田も壺井も申分ない。武力で知られた源滿仲、頼信等は警察力のない當時此處で歡迎され、遂には横暴をなした。多田院は天祿元年に佛像が出來たと傳へられ、滿仲の廟を中心とし、壺井權現は頼信・頼義・義家を合祀したもので、爾來源家崇敬の地となつた。當時の豪族は斯くの如く先祖の墓を作り、それを中心として新しく發展して行つたのが多い。云々。

●東洋史談話會

久しく中絶してゐた東洋史談話會が久方ぶりに五月二十四日午後六時半から樂友會館第一號室で開催され左の講演があつた。

耶律楚材の生年について　　山本　守君

宋代度牒の出賣年代について　　會我部靜雄君

長江旅行談　　松浦嘉三郎君

松浦氏は三月下旬より四月中旬まで上海方面に旅行され、尙楊守敬の水經注に關して武昌迄遡られた實話で、會我部氏の說は史學雜誌に發表される筈である。

●民俗學研究會

例會　五月五日午後六時半より百萬遍「かぎや」にて開催。新村、西田、小牧、金關、先生及石田幹之助氏以下二十七名出席、左の講演あり、十時半散會。

一、臺灣諸蕃の小人傳說　　森脇　忠雄氏

一、血液型と人種心性　　金關　丈夫氏

一、白樂天の詩中に見ゆる小人傳說　　石田幹之助氏

大會　五月十七日午後一時半より樂友會館にて民俗學會と合同の下に開會。東京側より小泉、折口二氏京都側より西田氏代表して講演さる。來會者二百名、五時閉會、晩餐會を催す。

一、年中行事の民俗學的研究　　西田直二郎氏

一、民間傳承と社會學的研究　　小泉　鐵氏

一、門　　折口　信夫氏

例會　六月二日午後六時半より百萬遍「かぎや」樓上にて開催。西田、梅原、金關、先生以下二十二名來會、十時散會、當日の講演は、

一、支那の七夕　森　鹿三氏

一、神名備に就いて　池田　源太氏

◉明治史研究會

第九回例會　四月三十日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開會、三浦博士、德重、原、向居學士等、出席者十六名左の講說あり十時半散會。

一、明治初年政治組織に現るゝ復古的現象について　有働　賢造君

幕末開國の必然性は國家觀念を强化し外來文化攝取の原動力となつたが傳統無視の極端なる行動が變革期の混亂を煽り特に官制改革に於る歐化主義の採用は保守的復古派の反抗を招き明治二年七月遂に政教一致の官制々定を見るに至つた。然し之は時代錯誤の甚だしきものであり、且つ復古派の主張も必ずしも此の如き官制の制定を必至的なりと考へしには非る如く政府內部に於る新舊思想の相剋それに加味された政略的見地等によつて激成されたるもので社會の安定は漸次此の如き保守的現象の生成を不可ならしむるに至つた。云々。

一、明治初年に於る岩倉具視の地位について　三浦　周行君

明治初年に於る彼れの地位と事業の發展を幕末混亂の過程より最も具體的に叙述し反對派の排擊よりする失脚はむしろ將來の活躍を約束せしめしものであり慶應三年岩倉村をいでゝ京師に歸るや志士團の指導的地位につき四年慶喜の大政を奉還せんとするや小御所會議に於る決意は悲壯を極め次で版籍奉還成つたがその不徹底性は彼れをして更に新なる改革を企てしめたりとし、當時に於ける薩長二强藩主及び西鄕の地位の重大性に及び彼等を上京せしめて政府の充實を計らんが爲めに自ら薩摩に赴き若し此使命を果さずば再び歸らずとの決意は遂に廢藩置縣の一大改革を促進完成せしめた。此の如き努力の次に來るは公の對外的活躍であつた。云々。

第十回例會　五月二十日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開會、牧、德重、原、向居、石垣學士及び學生合して十七名出席左の講演あり十時半散會。

一、江湖新聞に就いて　　鈴木　祥造君

先づ新聞發生の歴史的機緣が封建國家より近代國家への轉向期にありとし江湖新聞發刊が福地自身の個人的境遇特に彼の新聞に對する理解更に端的には中外新聞の發刊によつて促されたりと說き次で其の內容を解說し立憲制度成立に對する主張排佛棄釋又は倫理思想の混亂等に關する報導は以て時代相を窺知し得べく同紙の特色とする所は俳優に關する記事多く、且つ政治論評に富める點である。然し、佐幕的主張に偏せしことに於て遂に明治元年閏四月—五月二十二號にして發行禁止の壓迫を蒙るに至つた。云々。

一、明治初年封建制度滅亡史の諸問題　牧　健　二君

歴史の概念的把握は斥くべく體系的組織的究明が特に明治史研究を可能ならしむと說き日本封建制度の特色たる御委任關係に論及し武家時代より明治初年に到る封建

制度の變化は「天皇—武家—大名—家臣」（御委任・恩賞による契約關係・君臣關係・主從關係）より「天皇—藩主—家臣」（君臣關係・主從關係）への御委任關係の消失に重大なる意義を見るべく明治維新は實に多年の武家支配によつて地下的となつた天皇人民間の君臣關係が急激に表面的となりし事を意味し且つ明治初年の封建制度は周代のそれに一致し命の關係によつて成立せる事を詳說し從つて封建制度の滅亡も朝廷—藩主—藩士の關係が朝廷—人民の關係に轉換せるを示すにすぎずそれは版籍奉還によつて形式的に成立し廢藩置縣によつて實質的となつた。この法理的解釋による日本封建制度滅亡史の理解こそ明治史考察の關鍵たるべきでありこゝに明治維新は日本獨自の國體的本質を呈示せしものに外ならぬ。云々。

◉恩賜　京都博物館特別展覽

一、東福寺寶物展覽會　東福寺開山六百五十年忌記念事業の一として四月十日より二十二日迄同寺所藏の書畫類百三點が陳列せられ學者宗教家信者達を集めた。其中主なる陳列品は左記の通りである。（因實）傳吳道子筆釋迦

三尊像、國寶兆殿司筆五百羅漢像、白衣觀音像、十八天像、虎關筆元亨釋書、義楚帖等。

一、酒井抱一名畫展覽會　四月二十五日より五月八日迄御物十二幅及び諸家祕藏の名畫六十三點が集められて觀賞家を悅ばした。主なる物は次の如くである。東京酒井伯爵家流邊楓樹屏風、同松風村雨圖、東京細川侯爵家紅白梅圖、京都小野家十二ヶ月花鳥圖、東京岩崎家八ッ橋圖、埼玉大澤家所藏品、鷺浦筆抱一上人像等。

一、洛陶會兜樂家造作展覽會　六月七日より十三日迄樂家代々の名作を一堂に集めて好事者の注目を惹いた。陳列品中主なるものを擧ぐれば長次郎作獅子瓦、常慶作茶碗、ノンコウ作抹茶茶碗等である。

尙五月園城寺圓滿院黃不動の開帳に際して曼珠院所藏の模寫及び、靑蓮院靑不動を陳べて研究家に便宜を與へた。近時博物館が其特殊地位を利用して種々有益なる試みを催さるゝ事に對して感謝しなければならない。

◉醍醐寺靈寶展覽會

醍醐寺では醍醐天皇一千年御遠忌法要の記念として四月六日より同十六日迄寶物八十七點を陳列して一般の觀展に供した。美術史上に醍醐寺派と稱せらるゝ逸品を數多くもち又文書記錄類にも貴重なるものに富む種々の寶物が斯く重要なるもの多數一時に並べられた事は研究者達にも利する所尠からず有益な催しであつた。

會報

◉寄贈交換圖書

朝鮮史料展觀目錄　朝鮮總督府朝鮮史編修會
帝室博物館年報(昭和三年)　東京帝室博物館
臺北帝國大學文政學部紀要(第一の一)　臺北帝國大學
維新前後に於ける立憲思想(尾佐竹猛著)　邦光堂
伊那尊王思想史(市村咸人著)　下伊那郡國民精神作興會
薩道先生景仰錄(新村出著)　ぐろりやそさえて

校定出雲國風土記　島根縣皇典講究分所
廣島嚴島關係文獻展觀目錄　廣島史學研究會
商業と經濟(一〇の一)　長崎高等商業學校研究館
有終(一七の二)　遠藤佐々喜
龍谷大學論叢(二八七、二八八、二八九、二九〇)　龍谷大學論叢社
佛教美術(一三、一四、一五)　佛教美術社
史蹟名勝天然記念物(四の一二、五の一、二、三)　同保存協會
史學雜誌(四一の一、二、三、四、五、六)　史學會
史苑(三の三、四、五、六、四の一)　立教大學史學會
人類學雜誌(四五の二、三、四及二、三、附錄)　東京人類學會
雜誌索引(五、六)　下戸前繁松
宗教と藝術(一一の一)　谷龍大學文藝部
名古屋温故會報告(一三)　名古屋温故會
言語と文學(一)　臺北國語國文學會
歷史地理(五五の一、二、三、四、五、六)　日本歷史地理學會
民族學(二の一、二、三、四五の四、五)　民族學會
刀劍研究(二、三、一六八、一六九、一七〇)　南人社
經濟論叢(三〇の二、三、四、六)　京大經濟學會
伊豫史談(六〇、六二)　伊豫史談會
史學研究(一の二、三)　廣島史學研究會
字紙簍(一の一、一の三)　北平字紙簍社
史學雜志(一の六、二の一、二の二)　南京中國史學會
龍谷史壇(二の二)　龍谷大學史學會
考古學(一の一、一の三)　東京考古學會
國史學(二、三)　國史學會
眞宗學報(六)　眞宗專門學校出版部
大谷學報(一一の一、二)　大谷大學大谷學會
朝鮮古蹟圖譜(八、九)　朝鮮總督府
古蹟調査特別報告(第六冊)　同上

社會學雜誌(七一、七二、七三)　日本社會學會
考古學雜誌(二十の三、四、五)　考古學會
京都史蹟(一の三、四、五)　京都史蹟會
東北文化研究(二の四)　史誌出版社
史蹟名勝天然記念物(五の四、六)　保存協會
史學(八の四)　三田史學會
語原歷史學研究所週刊(一一〇—一一六、一二一)　國立中山大學
宗教と藝術(五)　宗教と藝術社
日鮮史話　第六編(松田甲編)　朝鮮總督府
民族(一〇一—一〇六)　國立中山大學語言歷史學研究所
支那研究(二二)　東亞同文書院支那研究部
佛教美術(一六)　佛教美術社
昭和四年の國史學界　筑波研究部
森田節齋と嬉路　武岡豐太著
西北外蒙古の今昔　須佐嘉橘著
通報(Toung Pao Vol. 27 No. 1)　Paul Pelliot
K. Shiratori, The Queue among the peoples of North Asia The Toyo Bunko

▲會員動靜

◉入會

福岡縣九州帝大法文學部　井上健三氏
(右紹介者　重松俊章氏)
東京市四谷區大番町七　横山剛氏
(右紹介者　吉田小五郎氏)
東京市下谷區池ノ端七軒町四五　正慶寺內　中村一良氏
(右紹介者　寺尾宏二氏)
東京市外瀧野川町　女子聖學院內　辻村正吾氏
(右紹介者　時野谷常三郎氏)
京京府下西巢鴨字宮仲二六九八番地　淺野利三郎氏
東京市芝區白金今里町三十九番地　松本信廣氏
(右紹介者　今石二三雄氏)
東京市下谷區櫻木町二三　杜多義周氏
(右紹介者　筑上鈴寛氏)

京都帝國大學文學部史學科　福尾猛市郎氏
同　大橋　克郎氏
同　日置彌三郎氏
同　樫村　壽一氏
同　中村　勤氏
同　國分　直一氏
同　山本　正信氏
同　田井　啓吾氏
同　小泉　精一氏
同　渡邊　茂藏氏
京都市左京區鹿ヶ谷宮ノ前　住友吉左衛門氏
仙臺市　東北帝國大學附屬圖書館
兵庫縣武庫郡御影町槇一一二三　佐々木文夫氏
京都市下鴨松ノ木町六四ノ四千石方　佐藤　良二氏
京都市上京區大宮通御池下ル小川旅館　萩野　端氏
京都市左京區岡崎堂ノ前町一　笠井熊次郎方　大草　順性氏
京都市左京區北白川別當町五四太田方　川上　健三氏
大阪府三島郡富田町東岡町　小川　勝氏
京都市吉田本町一大村方　忻去　儁氏
京都市吉田神樂岡町三番地　楠　正氏
京都市三本木丸太町角　堀井　一雄氏
京都市寺之内通室町東入ル　原山　鋭一氏
京都市北白川上池田町八　倉貫方　外山　軍治氏
伏見市本材木　大倉　善雄氏
京都市吉田本町五　清水方　藤田貞吉郎氏
京都市吉田上大路町十三　古谷方　安齋　二郎氏
京都市吉田中大路町吉田寮内　若城久治郎氏
（右紹介者　島田貞彦氏）

退會

道永啓太郎氏　高瀨武次郎氏　筑上　鈴寛氏

逝去

由比　質氏

右謹みて哀悼の意を表す。